

プロトタイプからの隔たりはどのように記述されるか？  
—英語軽動詞構文の他動性による分類を基に—

井口智彰（大島商船高等専門学校）

1. はじめに

構文には使用頻度の高いプロトタイプ的な事例だけでなく、周縁的な事例が存在することがコーパス等の調査により確認できる。本研究では、英語の軽動詞構文における周縁的な事例をプロトタイプからの隔たりの度合いによって記述する。

2. 軽動詞構文のプロトタイプ

(1a)が主動詞構文で、それに対応する(1b)が軽動詞構文である。

(1) a. She swam every morning.

b. She *had a swim* every morning (Stein, G. and R. Quirk 1991: 197)

以下、Wierzbicka (1988:300)の“The have a V construction is agentive, experiencer-oriented, antidurative, atelic, and reiterative.”をプロトタイプ的な事例の定義と仮定して議論を進める。

3. 周縁的な事例

3.1. 主語が有性物でない場合(eg. This new exhibition takes a look at...)

3.2. 外的な目標(endpoint)がある場合(eg. She had a walk to the park.)

3.3. 被動作主に影響を与える場合(eg. take a punch at someone)

4. 構文の他動性とプロトタイプからの隔たり

この構文のスキーマ的な特性として他動性が低い(cf. 田中 1996)ことが指摘されている。そのため、この構文のプロトタイプ的な事例からの隔たりの度合いは、他動性の度合いによって決まる。動作主の行為が動作主自身に向かう場合(eg. I had a walk)に最も他動性が低くなり、命令文や外的目標がある事例は他動性が上がる。主語の人称・時制・有性性の違い等により、他動性の度合いが変化する場合もある。本研究では、英語の軽動詞構文の他動性が、上記の諸条件により決定されることを個別の事例に即して検証する。

主要参考文献

- Stein, G. and R. Quirk. (1991). ‘On Having a Look in a Corpus’, Aijmer, K. and B. Altenberg eds. *English Corpus Linguistics*. London: Longman, 197-203.
- 田中実 (1996). 「構造的意味としての<他動性>」『人文論究』46(3): 159-170.
- Wierzbicka, A. (1988). *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.